

2021. 8. 29 (日) マタイ26:55~56

**26:55** また、そのとき群衆に言われた。「まるで強盗にでも向かうように、剣や棒を持ってわたしを捕らえに来たのですか。わたしは毎日、宮で座って教えていたのに、あなたがたはわたしを捕らえませんでした。

**26:56** しかし、このすべてのことが起こったのは、預言者たちの書が成就するためです。」そのとき、弟子たちはみなイエスを見捨てて逃げてしまった。

<説教>

主イエス・キリストとその弟子たちのゲツセマネの園における最後の場面です。

人々がイエスに手をかけて捕らえたとき大祭司のしもべに切りかかってその耳を切り落としたペテロに、イエスは「剣をもとに収めなさい。剣を取る者はみな剣で滅びます。」と戒め、弟子たちが「剣を取る」ことをお許しになりませんでした。

イエスはご自分を捕らえに来た群衆より遙かに多く強大な力を持つ御使いを天の父なる神にお願いしてご自分の配下に置くこともできたのですが、あえてそれをなさいませんでした。

なぜならイエスがそうすることは父なる神のみこころではなかったからです。

父なる神のご命令ではなかったからです。

もしあのときイエスがそうしていたなら〈こうならなければならないと書いてある聖書が〉つまり父なる神のみこころが―〈成就する〉(54)ことをイエスが妨げ邪魔することとなったのです。

それで「わが父よ。わたしが飲まなければこの杯が過ぎ去らないのであれば、あなたのみこころがなりますように」と既に祈られた(42,44)イエスはご自分の父なる神に徹底的に完全にお従いになり、ご自分を捕まえに来た群衆によって捕らえられたのです。

しかしイエスはここでは黙ってはおられませんでした。

ご自分に手をかけて捕らえた群衆に向かってお語りになり、彼らの罪とご自分の正しいこと―即ち父なる神への従順―とを証言なさいました。

「まるで強盗にでも向かうように、剣や棒を持ってわたしを捕らえに来たのですか。わたしは毎日、宮で座って教えていたのに、あなたがたはわたしを捕らえませんでした。しかし、このすべてのことが起こったのは、預言者たちの書が成就するためです。」(55,56a)

この週(受難週)の前半、イエスは〈毎日、宮で座って教え〉、また祭司長たち律法学者たちと論争して来られました(21:12~)。

もしイエスに何か不正があったなら白昼堂々とイエスを捕らえればよかったのです。

しかし彼らがイエスを捕らえた(後にローマ総督ピラトに引き渡す)のは、ねたみからでした(27:18)。

そんなうしろめたさ、やましさがあり、いわばそんな良心のかけらをも投げ捨てて、反対にイエスを〈強盗〉のようなユダヤ人にもローマ帝国にも危険人物だと見せかけるために〈剣や棒〉で武装したローマ兵の出動まで要請して、夜の闇に紛れてイエスを捕らえたのです。

「しかし、今はあなたがたの時、暗闇の力です。」とイエスがこのとき言われたとルカ

は記しています（ルカ 22:53）。

一方マタイは「しかし、このすべてのことが起こったのは、預言者たちの書が成就するためです。」というイエスの言葉を記し、〈預言者たちの書〉によってイエスが受けるべき苦難を予め示しておられた父なる神に知するイエスの従順を改めて記しています。

このようにイエスは、ご自分が〈罪人たちの手に渡される〉という父なる神がご計画しお定めになった〈時が来〉た(45)こと、また〈暗闇の力〉が働くのを父が許可なさり、その〈暗闇の力〉をも父がお用いになってみこころを〈成就する〉ことを知り、それゆえ父に全く従順に、そして全く委ねられたのです。

それで〈剣や棒を持って〉ご自分を〈捕らえに来た〉人々に抵抗することなく、同時に語るべきことはちゃんとお語りになって、父なる神のみこころに従われたのです。

そんなイエスの姿を覚えるとき（この場面だけでなく、これまでのイエスと祭司長たち律法学者たちとのやり取りのすべての場面もですが）、どうしてもその姿が重なる人がいます。

そして、特に日本の教会の歴史に連なる私たちが覚えていなければならない人がいます。

それは先の戦争中、日本による神社参拝強制に抵抗して殉教した韓国の朱基徹（チュ・キチョル）牧師です。

神社参拝反対者、大日本帝国への反逆者として目をつけられ、ついに「今日から説教するな！」と日本の警察に命令された時、「私は説教権を神から受けたので、神がやめると仰るならやめる。しかし、私は説教権を警察から受けたのではないから、警察がやめると言えるはずがない。」と朱牧師は答えました。

また「説教をやめなければ逮捕する！」という脅迫に対しては、「説教することが私の務めで、逮捕することは警察の務めだ。私は私の務めを果たす。」と答えました。

「大日本帝国警察の命令に従わないのか！」と言われて、「その日本の憲法は礼拝の自由を許可している。あなたがたこそ今礼拝を妨害し、大日本帝国憲法に違反しているではないか。」と返しました。

要するに、世の権力・権威と並び立ち（それからの独立・自由を保ち）つつ、信仰によって一神にどこまでも信頼して、神のみこころにどこまでも従って一、神から与えられた自分の務めを果たし、責任を果たすということです。

そういう「信仰の人」の原型が主イエス・キリストです。

確かにそのときの弟子たちのうちにはまだまだそういう〈キリストが形造られ〉（ガラテヤ 4:19）ていなかったのでしょう。

〈そのとき、弟子たちはみなイエスを見捨てて逃げてしまった。〉のです。

彼らも〈闇の力〉にはそのときは打ち勝てませんでした。

彼らはすべてを捨ててイエスに従って来た（19:27）はずだったのですが、いざという時にはまだまだ自分の命が惜しく、神のみこころの時が来るまでは誰も自分の命に触れることはできないと信じ切ることができませんでした。

このように、言わば一番親しく、一番愛を注いできた弟子たちにすらイエスは〈見捨て〉られ、裏切られました。

それもまたイエスが味わわれた苦難でした。

そのようにしてイエスは一番親しく愛した弟子たちとも引き離されて、人間の誰からも

助けられ支えられることなく、たったお一人で父なる神のみこころに従順に、私たちの罪のために死なれるべく十字架に向かわれました。

私たちの救いはただこのお方、十字架の死にまで父なる神に従われた主イエス・キリストにあるのです。